2021 年 4 月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

教区だより

特別号

Vol.12

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」

「あわれみましますしるし」

名古屋教区第 30 組惠林寺　荒山 淳 氏

◎『教区だより』特別号　について

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、５月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

通常の体制に戻るまでの間、引き続き特別号というかたちで発行してまいりますので、教区の皆様には、ご理解いただきますようお願いいたします。

※毎月掲載しております、「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

『教区だより』特別号の発行について

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなった現実に直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出遇い直していくことが大切ではないかと思います。

このような願いから、京都教務所では「今、この時に、親鸞聖人に遇う」というテーマのもと、『教区だより』特別号を発行してまいります。

京都教区教化委員長　日野　隆文

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」

「あわれみましますしるし」

名古屋教区第30組　惠林寺　荒山　淳

「ほとけ」の由来

今年は、聖徳太子（以下、太子）の千四百回御忌をお迎えする。親鸞聖人（以下、宗祖）は、時と世を貫いて、今を生きる我らをも、あわれみましましておられる太子を、日本のお釈迦様と恭敬されていた。推古帝の摂政として国政の中心に在りながら、精神は仏道に立ち、人々の中にあっては、苦悩する民衆の上に君臨することなく、民衆自身となって生きられた太子であった。

その太子が誕生される三十六年前の五三八年、百済より仏教が伝来する。当時の人々は八百万の神々「国神（くにつかみ）」を信仰していた。そして伝来した仏教を「蕃神（となりのくにかみ）」「他神（あだしかみ）」「他国神（たこくしん）」等と呼び、受け入れるかどうか崇仏派の蘇我氏と、拝神派の物部氏との間に対立を生んだといわれる。

そして五五二年十月、印度から朝鮮半島・日本へと日本最古の仏像・善光寺一光三尊仏が渡ってきたという。崇仏派蘇我氏の住む明日香村向原に仏像は安置されたが、この仏像を運んできた人々とともにウイルスも日本に渡り、感染症問題が起こり始めたと伝えられている。そのことを宗祖は、

そのときほとおりけともうしける
疫癘（えきれい）あるいはこのゆえと
守屋（もりや）がたぐいはみなともに
ほとおりけとぞもうしける

（『善光寺和讃』聖典五一〇頁）

と和讃されている。この仏像が難波の浦に渡来し、物部守屋（大連（おおむらじ）・有力豪族）を中心に拝神派の者たちが、疫癘がはやるのは日本へ渡来した仏が原因ではないかと申し合い、仏像を安置する向原寺を焼き払い、仏像は難波の堀江に焼棄されたのだった。仏（ぶつ）を称して「ほとおりけ（感染症による熱気（ほとおり）の発生源（け））」と名付けたという。そして排仏運動を効果的に推進しようと「ほとおりけ」の名を略し「ほとけ」と呼びならわし、拝神派の宗教者たちもみな、蕃神の導入に反対し、如来を口々に「ほとけ」と呼んでいたという。教法を聞信することもなく仏教排斥のために付けられた名が「ほとけ」の由来である。

疫癘は留まることを知らず、太子の父・用明帝も即位二年後に痘瘡（とうそう）で死去し、帝崩御を縁に物部氏と蘇我氏との戦争に発展していく。この時、太子十四歳であった。幼い眼に焼き付いた戦争の光景が、太子自身に人間として生きる意味を問わしめていったのであろう。接戦の末、物部氏は討ち

滅ぼされ、推古帝と蘇我馬子のもと二十歳の時、太子は摂政となる。戦乱と疫癘で荒廃した国を立て直し統治するために仏教精神を国の本となし、人の生き方を「三宝興隆の詔（みことのり）」に倣い、仏・法・僧の三宝興隆が目指された。

如来如実の言

このように疫癘が蔓延し戦乱が相次ぐ背景を『善光寺和讃』が伝える。その前に『愚禿悲歎述懐』十六首の総結文が置かれ、

已上十六首これは愚禿がかなしみなげきにして述懐としたり。この世の本寺本山のいみじき僧ともうすも法師ともうすも　うきことなり。

（聖典五一〇頁）

と述べられている。何故、宗祖はこの和讃を遺したのだろうか。この文を一読すると、浄土真宗に帰してはみたが、真実の心を戴くことができなかった悲しみ歎きが述べられてあるように読める。しかし、この言葉の真意は、宗祖自身が浄土真宗に帰し、如来の本願を聞くことを得て、私は真実の心なき身であると信知せしめられた感動の告白なのだろう。

自身の心をいくら励まし頑張ってみても、自分の力で真実の心を賜ることはない。我が身の事実を如来の本願から言い当てられ、自身の虚仮不実に頷く。言い当ててくる如来の言葉を「真言（しんごん）」「如実言（にょじつごん）」という。言い当てられ頷く心を「真実信心」という。自分の抱えている問題さえ気づかずに、ましてその問題を乗り越えて解決すべき課題など全く解っていない自身なのだと、如来如実の言（みこと）に指摘され初めて、私は真実の心なき身であると信知せしめられるのである。

宗祖は『御消息集』に、

念仏せんひとびとは、かのさまたげをなさんひとをば、あわれみをなし、不便におもうて、念仏をもねんごろにもうして、さまたげなさんを、たすけさせたまうべしとこそ、ふるきひとはもうされそうらいしか。よくよく御たずねあるべきことなり。

（聖典五七二頁）

と、念仏者の姿勢を述べられる。

念仏を妨げる者にもあわれみの心をもって、念仏申すことが本願念仏を戴いた者の姿であり、「ああ、私のことであった」と、我がこととして共に助かる道を生きることこそが念仏者なのだと師法然上人の如実の言をもって伝えていてくださる。

本願念仏の妙薬

コロナウイルス感染症問題に一つの視座を与えてくれたのが飛鳥時代、政権奪取の手段に仏像を「ほとけ」と名づけ、人と人とを分断対立させようとした守屋であった。つまり人を分断させる要因はウイルス自体ではなく、私自身であるということを、今に先駆けて守屋という一人の人間の生き方が示してくれているのではないだろうか。

コロナワクチン接種が始まった今、新薬によりウイルス感染への抗体が体内に作られ、身体の健康は確保されていくであろう。

しかし、守屋の生き方が教えた、人と人とを分断させ、そこに偏見と差別のしるしである「排除」を生み出していくのは「無始よりこのかたの、無明業障のおそろしき病」（『御文』聖典七九二頁）である。この病に感染しながらも、無自覚である我らに如実の言は目覚めを促し続けて下さる。

生活の隅々にまで病が充満していることに気づいていくこと。そして悲歎を生きる一人（いちにん）をあわれみをもって尊厳なる一人として敬う眼を賜ること。コロナウイルス感染症問題を機縁とし、人奥に在る「無明業障の恐ろしき病」を厭う本願念仏の妙薬「南無阿弥陀仏」を戴くことが「いま、この時親鸞聖人と遇う」ことではありますまいか。

教務所からのお知らせ

《得度》

二〇二一年三月九日付
近江第八組　玄昭寺　清末あゆみ
［敬称略］

《住職任命》

二〇二一年二月二十八日付
山城第二組　圓重寺　小山大来
山城第二組　正賢寺　久保晃子
若狭第一組　眞宗寺　真木慈光
［敬称略］

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

山城第三組　常福寺坊守　福森怜子　七十七歳
二〇二〇年十一月十三日
近江第一組　閑栖寺住職　佐藤賢隆　五十歳
二〇二一年一月二十四日
近江第四組　圓照寺住職　高橋良孝　九十一歳
二〇二一年二月十八日
近江第二十五西組　正通寺副住職　竹内祥文　五十八歳
二〇二一年二月一日
近江第二十五西組　傳正寺前住職　河野貫亮　八十九歳
二〇二〇年十二月三十日
［敬称略］

《教務所事務休暇のお知らせ》

四月三十日（金）を事務休暇といたします。
緊急（期間中の授与物のお渡しや院号法名の申請、収骨の受付等は含みません）の場合は、左記緊急連絡先までご連絡いただきますようお願い致します。
［緊急連絡先（教務所携帯電話）］
〇九〇―三七一九―七九八二

《教務所員の異動について》

三月一日付で明泉周芳主計が財務部に異動となりました。
また、同日付で長浜教務所より内麻頭祐主計が着任いたしました。

《教区だよりについて》

昨年五月号から教務所編集のもと「特別号」として発行してきましたが、五月号より出版委員会編集で再開します。段階的に内容を充実させていく予定です。

駐在日記

「ヒロシです」の芸人ヒロシが、最近はソロキャンプ（一人のキャンプ）を代表する存在として注目されている。一方でグランピング（グラマラス・キャンピングの意）というキャンプ用品や食事が用意された豪華なキャンプも流行っている▼私も３０年以上前からからキャンプをしてきた。キャンプというよりバイクに道具を積んで山奥に入る野宿だ。一番の思い出は高校一年生の時に原チャリで行った北海道。大阪から青森まで３日かかり北の大地を野宿で周った▼子どもが１歳の時にキャンプに行くととても喜んだ。北海道に転勤になりアウトドア天国だと喜んだ私はグランピングではないけれど大きいテントや家族用の道具をそろえて何度かキャンプに行ったが、子どもは大きくなるとまさかの虫嫌いのインドア派になり、大きいテント張りや道具運びも面倒になってきて、全然行かなくなった▼昨年、久しぶりにソロ野宿に行った。ボロボロの小さいテントと愛用の灯油ストーブ等の最小限の道具で焚火をした。真っ暗な山の中でジーっと炎を見るのは至福の時。やっぱりこれだ、と思った▼聞法は、教えを身に着けるのではなく着けているものを脱ぐこと。ならば豪華なキャンプからシンプルな野宿へ、は聞法に近いかも？　いや、違う。聞法よりも至福の時を求めているだけだ・・・。いやいや、シンプルな生き方を求めるのは何となく真宗のような・・・。いやいやいや、こんなことを考えること自体真宗ではない・・・。いやいやいや・・・。

（駐在教導　谷本　修）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌
「教区だより」 特別号 Vol.12
発行人 日野 隆文 （真宗大谷派京都教務所長）
発行所 真宗大谷派京都教務所
〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel：075（351）5260 Fax：075（351）5256
発行日 ２０２１ （令和３） 年４月１日
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp
真宗大谷派京都教区ホームページ
京都教務所　検索